

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

- UIFA JAPON 第8回総会開催
- 広がるレースワーク7
- タイの「ダルマの心」
- カナダの老人福祉施設を訪ねて
- この指とまれー喜多方ワークショップのその後
- NEXT 30 years 国際会議 IN HELSINKI
- ドコモ国際会議へのお誘い
- ユニバーサル・デザインを考える
- 「住宅設計のユニバーサルデザイン」
- 役員会報告



■UIFA JAPON 第8回総会開催

UIFA JAPON2000 年度第8回総会が開催されました。

日時：2000年6月10日（土） 13:30~14:05

場所：弘済会館 4階会議室「桜」

出席者：30名、委任状52名 計82名（定足数64名）

開会宣言：小川信子副会長

挨拶：中原暢子会長（本総会議長）

議事：

- 第1号議案 1999年度の活動と収支報告・監査報告
 - 第2号議案 2000年度の活動計画案と予算案
 - 第3号議案 役員を選出
- 第1~3号議案はすべて可決・成立、承認されました。

議事内容：

1. 第2号議案：2000年度の活動計画案と予算案

◇総務・財務

- ・99年度収支報告書及び監査報告
- ・2000年度予算書の作成
(特別会計予算として次回UIFA世界大会準備費を計上)

・毎月1回役員会の開催

・2001年度予算案の作成

◇事業

・第21回(8月)、第22回(11月)、第23回(翌2月)計3回海外交流の会開催

◇広報・渉外

・第41~46号計6回UIFA JAPON Newsletter 発行

・その他活動

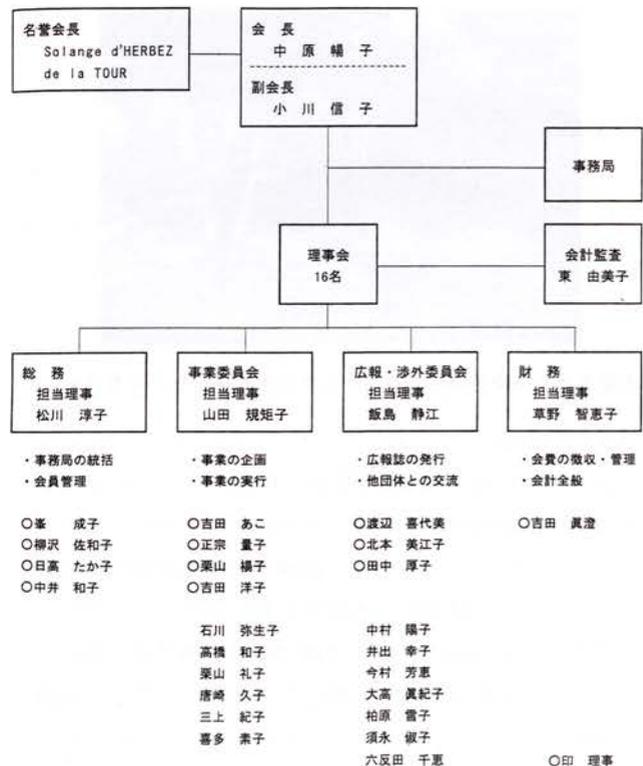
「この指とまれ」施設見学等2回開催予定

クロアチアの本「建築の理論と実践における女性の研究」翻訳(月1回)の継続

2. 第3号議案：役員を選出

今期(2000,2001年度)に於けるUIFA JAPONの組織と役員の仕事分担。

UIFA JAPONの組織と役員の仕事分担



(飯島静江)

■連載企画 広がるレースワーク 7

UIFA 国際女性建築家会議第 12 回日本大会のその後

タイの「ダルマの心」

柏原雪子

公園の入口は一つか二つ

タイにはカオヤイをはじめとする多くの国立自然公園があり、象や虎、珍しい鳥やさまざまな動物・植物が棲息しています。これらの公園はその大きさにもかかわらず、入口が一つ、二つしか設けられていません。出入りする車の入出時刻、ナンバー、人数などをすべてチェックすることで環境を保護しているからなのです。

この国立公園も、一時はホテルやゴルフ場開発の波に大きなダメージを受けたことがあります。が、10年ほど前、政府が公園内の開発を禁止したおかげで、今は静かな自然を取り戻しています。アユタヤ世界遺跡の公園にしても同様です。公園敷地内に建てられたホテルは増改築禁止となり、近い将来営業停止が決められています。

このようにタイでは、自国の自然を守ろうという動きが活発です。日本ではタイのように政府主導で動くことはむずかしいかもしれませんが、今、誰かがまず最初の一步を踏み出す必要があります。そして、その動きはすでに各地で始まりつつあるようです。



大型ホテルは姿を消し、自然のなかにとけ込んだバンガロー

「ダルマの心」

タイの人のなかには、「日本の援助によって経済が発展するのは歓迎だが、日本人みたいにはなりたくない」と言う人がいます。これは、「経済の発展こそ文明の発展である」という従来の日本型文明観に対するアンチテーゼです。タイ人は、日本人の持つ性格・価値観の中に、何か受け入れがたいものを感じています。日本は「経済を発展させ裕福になる過程で、何か大事なものを失ってしまった国」と見られているのです。失ったものは「信仰（いわゆる宗教とは違います）」かもしれません。「理

法（ダルマ）の心」かもしれません。ただその中の一つに、「環境（自然）」があることはまちがいないでしょう。そして、タイ人はこれらと引換えに文明を進める気はないようです。

「自然」にやるというタイ人の流儀

そもそも環境問題という言葉は、「自然保護」と「人間環境の確立（のための自然破壊）」という相反する命題を含んでいます。しかし、一方に傾斜するのではなく、共存することこそがタイの人たちが願う進歩の方向でしょう。環境問題のスペシャリストはとかくおのれの立場に固執しがちです。しかし、一方に傾斜するのではなく、共存することこそがタイの人たちが願う進歩の方向でしょう。そもそも人間も自然の一部なので、それが本来の方向であるに違いありません。そのためには長い時間がかかりますが、タイ人は事を急ぎません。言葉通り「自然」にやるというのが、タイ人の流儀です。

日本人は目標に向かって一目散に突っ走る傾向が大ですが、急速に拡大された成果は急速に縮小するというのがバブル時代に私たちが得た教訓です。日本人ももっと長期的な流れのなかで、成果を積み重ねる努力をしなければなりません。2代～3代にわたって努力を継続できるインフラストラクチャーの構築こそ、いま取り組むべき最重要課題だと信じています。（バンコクにて）

カナダの老人福祉施設を訪ねて

田中厚子

セミナーを企画

「カナダの老人施設をみてみたい」という友人の一言から、彼女が介護福祉士をめざして勉強していた短大の同級生15名と教師3名が参加する老人介護の短期セミナーを、カナダ・オンタリオ州立セント・ローレンス・カレッジで開講してもらった。1月に打ち合わせにでかけ、3月のセミナーの企画をまとめるという超特急の企画だったが、講義と施設見学をぎっしり詰め込んだプログラムが出来上がった。カナダは福祉の先進国であり、小さな町でさえ老人ホームやシニア・アパートが目につく。また、老人学（Gerontology）も専門領域として定着しつつある。その実情を総合的にみる事ができたこのセミナーの内容を簡単にご紹介したい。

1週間のプログラム

1日目 空路でオタワへ、そこからバスで2時間後キングストンに到着。キングストンはオタワが首都になるまでカナダの首都だったところで、歴史的な建造物や教育



左上 個室の中はそれぞれに飾られている

上中央 1人の介護者が3~4人の食事を補助するテーブル

右上 電子レンジからカウンターまでお皿を移動する回転台

左下 カレッジでのディベートの授業に参加

機関の多い人口10万人の都市である。

2日目 歓迎会（市長も参加）。キングストン市内観光。大学スタッフの自宅で近隣のシニアを交えたパーティ。

3日目 9時から5時まで連続セミナー。6人の講師の講義。タイトルは、「カナダの老人学と公的政策」「高齢者のためのコミュニティ・サービス」「キングストンのアルツハイマー協会」「治療のためのレクリエーションと高齢者」「長期介護施設における活動とレクリエーション」「家族介護と高齢者」。

4日目 午前セント・ローレンス・カレッジにて、「レクリエーションと活動」の授業に参加し、カナダ学生のプレゼンテーションの後ディスカッション。午後プロビデンス・マナー（1861年設立の老人福祉慈善施設）見学。

5日目 午前ヘレン・ヘンダーソン・ケア・センター（私立老人ホーム）見学。午後大学で授業「老人への薬物投与」についてのディベートに参加。夕方セント・メリー・オブ・ザ・レイク病院にて介護機器を見学。

6日目 オタワに移動し、グッド・コンパニオン・センター（大規模デイケアセンター）見学。午後国会議事堂見学。

7日目 ブリティッシュ・コロンビア大学見学。帰路。

人を大切にする

介護福祉を専門とする学生や教師と一緒に一週間学んで、日本とカナダとの介護にたいする姿勢の違いを考えさせられた。高齢者施設の建物や設備は、日本の新築施設に比べればさりげないものが多いが、空間の余裕、暖かい雰囲気、庭園の積極的利用などが特に印象的だった。そして入居者への対応という面では、否応なくカナダの方に、人の配慮を感じた。

例えば最初に訪れた施設での日本人学生の驚きは、「(車椅子の入居者が)ブラジャーしてる」というものだった。日本の高齢者施設ではあまり見られない光景なのだという。習慣の違いがあるとはいえ、身だしなみを整

える意識は、生きる力に繋がるものかもしれない。

また、施設内の個室に対する感覚も異なる。カナダでは個室の中はさながら自宅のように、持ちこみの家具や置物が並んでいる。「こちらではなるべく自宅と同じように暮らして欲しいと思っています。年をとるということは、それだけでなく失うものが多いのですから」というカナダのスタッフの言葉が印象的だった。

さらにレクリエーションとなると、日本では団体行動としての体操やゲームが多いが、カナダでは施設入居時に、専門のスタッフが個人の体の状態や興味にあわせてメニューを作成する。デイケア・センターでの多様な活動は、さながらカルチャーセンターのようだ。

バリアフリーは当然

カナダでは、町の公共スペースや建物内でのバリアフリーは当然のこととなっている。老人介護施設ではむしろ、いかに家庭的な雰囲気をつくるかに工夫が見られた。プロビデンス・マナーの建物は140年以上前の煉瓦造だが、最近の改築でインテリアは明るいパステルピンクとグリーンに統一された。ラウンジにはくつろぎやすい椅子が置かれ、白い壁面をなるべくなくそうと壁画が施されていたりする。

ハードとしての施設よりも、その社会や制度、家族、心の状態が大事だということを痛感したセミナーだった。行政予算カットバック、家庭問題等カナダも困難を抱えている。しかし、アルツハイマー協会や給食宅配等のボランティアが社会に根づき、ネットワークを形成している。おそらく日本が福祉先進国から学ばねばならないのは、「人」を大事にする姿勢だろう。それは、老人介護の問題にとどまらず、教育等あらゆる問題の根幹であり、今、最も真剣に取り組まねばならないことではないだろうか。このようなセミナーを継続し、多くの人にカナダの高齢者介護の現状をみていただきたいと思う。

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-6-5
麹町E・C・Kビル 榊生活構造研究所内
TEL 03-5275-7861 FAX 03-5275-7866
メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP

この指とまれ—喜多方ワークショップのその後

会員の佐藤久美子さんが国際会議で煉瓦建物の保存と再生を発表したことがきっかけで訪問した際にお目にかかった喜多方市の白井市長さん、会津喜多方商工会議所副会頭冠木さん、佐藤さんの母上田中フミ子さんへ、訪問メンバーで作成したささやかな記録綴りをお送りしたところ、市長さんからは、喜多方市の第4次総合計画を策定中なので資料や意見を参考にしたいというお手紙をいただき、あるいは冠木さんからは、われわれの訪問記からまちづくりの参考になることを多く見つけることができたというE-mailが届きました。また、田中フミ子さんからは、喜多方に住みつけていると気が付かない感想や意見があつて目から鱗が落ちたなどと過分なお返事をいただきました。

市では「あきない塾」を開いて勉強をしているそうです。そこに参加する塾生のなかには、そこでの勉強が刺激になって、店蔵を改造したり、住まいとして活用したりする若い人たちも出てきて、理想的な方向で動き始めている。

佐藤さんのプロデュースでお目にかかった市長さんや冠木さん、田中さんなどに、お礼としてお送りしたささやかな綴りが、地域の計画に少しでも役立つならばほんとうにうれしい。これもレースワークのひとつと言えるかもしれません。

(渡辺喜代美)

■NEXT 30 year 国際会議 IN HELSINKI

<介護福祉>の未来を探る国際シンポジウムが2000年8月23日(水)から25日(金)ヘルシンキで開催されます。日本からは三宅理一、小谷部育子ほか自治体の代表も参加します。北欧側は、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、スウェーデンから行政、大学などから参加してきます。詳細は日本女子大学 小谷部育子 電話 03-3943-3131 (内 7153)。

■ドコモモ国際会議へのお誘い

9月13日(水)～23日(土)に、ドコモモ国際会議に合わせた日程でサンパウロ、マセイオ、ブラジリアを訪れる「ブラジル建築ワークショップ2000」が行われます。講師・随行者は、ブルーノ・ロヴェルト・パドバノ、リカルド・フィレット、マリア・アンジェリカ、カルロス・ティケイラ、連健夫、中村陽子、田村元、渡辺研司です。帰国後、作品集展示会とシンポジウムを予定しています。参加費用は、338,000円です。詳細は中村陽子(電話 03-3387-2367・FAX03-3387-2273)へ。

■広報日より

「この指とまれ」の見学会で、埼玉県立大学・同短期大学部をみてきました。清々しい空間ですが、ちょっと冷たい感じも。こんな作品をつくった、あの展覧会が面白い、あそこを見に行こう等

ユニバーサル・デザインを考える
「住宅設計のユニバーサルデザイン」

ある時、雑誌のインタビューを受けていてあることに気づいた。「共働きの家族にとって良い家とは?」「幼い子どものいる家はどうすれば良い?」「高齢者のために良い住まいとは?」これらの問いに私は、いつも同じ様な答えを返していたのだ。私の答えは、できるだけ引き戸を使い、引き戸を開ければワンルームに近い間取りにすること。廊下はつくらないこと。キッチンも対面式にするなどして常に目がとどくようにし、だれもが炊事に参加できるようにすること。水回りが寝室やキッチンの近くにあること、など。

雑誌や本に載っている高齢者や障害者のための住まいの物々しさに、常々違和感を持っていたので、このことに気づいてからよけいに、障害者のいる家でもなるべく普通に(=ユニバーサル)設計するようにこころがけている。

最近も高齢の障害者のいる私の設計した住宅の子世帯の若い施主がこんなことを言っていた。「玄関の手すりは、2歳のこの子のためにずいぶん役だっているんですよ」と。(東由美子)

■役員会の報告

2000年第2回 5月15日(月)

出席者: 中原 小川 樹川 田中 東 正宗 峯 山田 渡辺 吉田 (8)

議事: ・会員現況—130人

- ・2000年度役員体制—会長1、副会長1、事業5、広報4、総務5(含地方)、会計1、会計監査1
- ・2000年度総会準備について
- ・1999年度収支報告、2000年度予算案について
- ・その他—新旧役員交流会開催(6/10)

2000年第3回 6月19日(月)

出席者: 小川 樹川 東 正宗 峯 山田 飯島 吉田 (6)、北本 栗山

議事: ・2000年度総会・講演会・懇親会の総括

出席者 総会・講演会 34人、懇親会 26人

要望事項 意見交換の場を設ける(次年度から)

・今年度の活動について

準会員制度の導入、他事例を調べ検討する。

UIFA JAPON 宣伝用パンフレット作成: 広報担当

(A4版、3折り、500部)、新会員勧誘など

・「この指とまれ」参加希望者9名(6/19現在)

(飯島静江)

「この指とまれ」では皆さんの意見や情報を待っています。お気軽に uifa@LIQL.CO.JP までメールください。

(編集長: 田中厚子、編集担当: 飯島静江、渡辺喜代美、中村陽子、井出幸子、大高真紀子、須永優子)